

## ゴジャール・ワヒー語の関係節構文

吉枝 聡子

はじめに

1. データ
2. 関係節構文の構造
  - 2.1. 関係節のタイプ
  - 2.2. 主節との関係

結語

### はじめに

ワヒー語は、イラン語派東イラン語に属し、アフガニスタン（バダフシャン州ワハン回廊地域）、タジキスタン（ゴルノ・バダフシャン州）、パキスタン（ギルギット・バルティスタン州上部フンザ・ゴジャール地域）、中国（新疆ウイグル自治区）の4カ国にまたがって分布する言語である。ここで扱うゴジャール・ワヒー語は、パキスタン北部～アフガニスタン～中国国境地域に位置する、ゴジャール（上部フンザ）地方を中心に分布する。高度7000m超の峻嶒な山岳地帯に囲まれ地理的に孤立したフンザ～ゴジャール地方は、1978年のカラコルム・ハイウェイ開通時まで名だたる辺境であり、ゴジャール・ワヒー語には、古形を残す文法事象や語彙が、豊富に残されている。また、タジキスタンの公用語であるペルシア語の影響を強く受けたタジク・ワヒー語との間には、少なからぬ語彙・文法上の差異が認められる。

ゴジャール・ワヒー語の関係詞は、*kumd*, *ki*, *tse* の組み合わせによって表され、同一の内容に対して複数の表現による言い換えが可能である。これらは類似の外見をとるためか、関係節構文を形成する際に話者に混乱が生じたり、文によって適格文・非適格文の扱いが異なるなど、不安定な使用実態が見て取れる。

例えば、主要部が関係節の主語である「あそこに立っている (*dra vrvsetk*) 少年 (*kaš*)」については、以下の4通りの表現を確認している。

- a. *ya kaš kumd ki dra vrvsetk...*
- b. *ya kaš ki kumd dra vrvsetk ...*
- c. *kumd kaš ki dra vrvsetk ...*
- d. *ya kaš dra tse vrvsetk ...*

また、主要部が直接目的語になる「君が持ってきた (towe wuzmetu) グラス (gilos)」に対しては、

e. ya gilos kumd ki towe wuzmetu ...

f. ya gilos ki kumd towe wuzmetu ...

g. kumd gilos ki towe wuzmetu ...

h. towe ki kumd gilos wuzmetu ...

i. ya gilos towe tse wuzmetu ...

の5通りの形が可能である。関係詞 *tse* を用いた、明らかに異なる *d* と *i* を除き、上の3例と4例はそれぞれ *kumd* と *ki* の位置が入れ替わっただけの類似の形式を持っており、話者も紛らわしいと感じることがあるようである。しかも *b* と *f* については、*b* は話者によっては非文と認識されることもあり、*f* は後に続く主節によって「グレー度」が異なるなど、その適格性についてインフォーマントの判断が分かれる場合がしばしば観察される。

このように、同言語において関係節構文の使用が安定しない現状には、通常の会話では単文と接続詞でつなぐ談話方式が一般的であり、関係詞構文は回避されることが多いこと、また、無文字言語であるゴジャール・ワヒー語では規範文法が構築されていないことなどが、その背景にあると推量される。しかしながら、適格・不適格の境界にあるものも含め、これらの例をつぶさに観察すると、それぞれの用例には、混乱を引き起こしている構造上の理由や、同言語がもつ語法上の特徴といった様々な要因が働いていることが看取できる。さらに、タジク側・パキスタン側双方を通じて先行研究<sup>1)</sup>では未報告の、新しい関係節タイプが存在することも明らかにになっている。

以上をふまえ、本稿は、ゴジャール・ワヒー語の関係節形成とその使用現状を概観し、類型論的位置づけを試みながら、そのメカニズムの解明と、同言語がもつ構文上の特徴について考察することを目的とする。

## 1. データ

本稿で提示するデータは、全てゴジャール・ワヒー語の主要村落である、グルミット村とシスーニー村に居住するインフォーマントの協力によって得たものである。同言語の話者数等の詳細については吉枝 (2005b)、音韻体系およびその表記方式については Yoshie (2005a) を参照されたい。

## 2. 関係節構文の構造

### 2.1. 関係節のタイプ

ゴジャール・ワヒー語の関係節は、関係詞 *kumd*、接続詞 *ki*、および従属節標識 *tse* の組み

合わせにより表され、その種類は①主要部（先行詞）+ kumd ki<sup>2)</sup>, ②主要部 +tse, ③ kumd + 主要部 + ki にまとめられる<sup>3)</sup>。各々については、一部の要素が省略、あるいは他要素が臨時に付加されたバリエーションも観察される。

### 2. 1. 1. 主要部 + kumd<sup>4)</sup> ki

ゴジャール・ワヒー語の関係節で最も基本的な形式は、関係詞 kumd と ki によって導かれる関係節が主要部（先行詞）に後続するタイプである。kumd は本来、疑問代名詞または疑問形容詞（「どちら；どちらの」）として用いられるが、関係節構文では関係詞として機能する。先行詞の定性が強い場合には、主要部の前に指示詞 ya<sup>5)</sup> などが置かれることもある。

この関係節型では、kumd は先行詞の関係詞節における働きに応じて変化し、Moving Particles<sup>6)</sup>（以下 MovPt で示す）やアスペクト辞などの前接辞も kumd に付加される。関係節内では主要部は空所となるのが普通である。この点で、このタイプの関係節における kumd は関係代名詞的機能を有すると言ってよい。kumd ki を用いた関係節は極めて生産的であり、関係節化に関わるすべての階層<sup>7)</sup>について形成が可能である。なお、関係節中では従属節標識の tse が余剰的に置かれることがある。

主格

- 1) ya prčoð [kumd-eš ki kla (tse) puyd] 「家畜を追っている少女」  
DEM 少女 REL-PROG.SUF CONJ 家畜 追う PRES.3SG

対格

- 2) ya xat [kumd ki maže navišetu] 「私が書いた手紙」  
DEM 手紙 REL 私 ERG<sup>3)</sup> 書く PAST.PFT

与格

- 3) yem kaš [kumder-em ki šapik ratu] 「私が食事を与えたこの少年」  
DEM 少年 REL.DAT-MovPt.1SG CONJ 食事 与える PAST.PFT

奪格

- 4) aya ðay [kumden-em ki kar deštu] 「私が車を買った男」  
DEM 男 REL.ABL-MovPt.1SG CONJ 車 買う PAST.PFT

属格

- 5) ya ðay [kumd(e) nung-i ki karim tey<sup>9)</sup>] 「名前をカリムという男」  
DEM 男 REL.GEN 名前 -MovPt.3SG CONJ カリム PRES

主要部が前置詞の目的語になる場合には、主要部が前置詞ごと関係節の前に出る。

- 6) a tem kapčen [kumd ki maže moč ferd]

DEM PREP+DEM<sup>10</sup> スプーン ABL REL CONJ 私 ERG スープ 飲む PAST.ST

「私がスープを飲んだスプーン」

\*関係節内における代名詞残留

以上のように、このタイプの関係節内は主要部空所型となるが、主要部が所格や奪格、前置詞の目的語など、関係節化に関わる階層の下側に属する場合、関係節内で代名詞等が残存する、より明示的な形式を用いることがある。この場合には関係詞 *kumd* は変化せず、主要部の関係節内における機能は対応する形式によって示される。次の例は4)と同じ意味だが、主要部に対応する前置詞と近称詞との縮約形が、関係節内で奪格を取って残留している。

aya     ðay   [kumd ki   maže    tsamen                    kar       deštu]...

DEM 男     REL       私 ERG   PRES+DEM<sup>11</sup>.ABL 車 OBL2 買う PAST.PFT

「私が（彼から）車を買った男」

2. 1. 2. *ts* による関係節

ゴジャール・ワヒー語では、*ts* を用いた関係節も、会話文等のくだけた文を中心に、高頻度に観察される。*ts* は従属節標識として機能し、副詞節等も導く他<sup>12)</sup>、関係節構文では単独で関係節を導くことができる。*ts* が従属節を導く場合の位置は特徴的で、*kumd ki* のように先行詞に後続するのではなく、主として関係節内の動詞の前に置かれる。*ts* は常に不変化であり、このタイプの関係節における主要部の機能は、主要部自体の変化によって示される。

7) ya     prčod       [dra-eš               kla    ts    puyd] 「あそこで家畜を追っている少女」

DEM 少女 NOM   そこ -PROG.SUF 家畜 REL 追う PRES.3SG

8) ya     pay-em                                    [ts    pitu] 「私が飲んだヨーグルト」

DEM ヨーグルト OBL2-MovPt.1SG REL 飲む PAST.PFT

(または ya pay[-em ts pitu])

9) ya     kašer-em                                [šapik               ts    ðet] 「私が食事を与えた少年」

DEM 少年 DAT-MovPt.1SG 食事 -OBL2 REL 与える PAST.ST.

2. 1. 3. *kumd* + 主要部 + *ki*

ゴジャール・ワヒー語では、上にあげた二種類の関係節型に加えて、*kumd* を主要部の前に置き、*ki* で関係節を導くタイプの構文も高頻度に観察される。

10) [kumd   šapik   ki                                θetu] 「焦げ（てい）たパン」

REL   パン   CONJ-MovPt.3SG 焦げる PAST.PFT

上の文では *kumd* が主要部 *šapik* の前に立ち、*ki* と挟み込む形で関係節を形成する。この *kumd* は、Noun Phrase Accessibility Hierarchy における属格から下の階層については関係節化することができない。主要部の関係節内における機能は主要部自体の変化によって示される。以下、類似の例を示す。

11) [kumd branj ki maže yitu] 「私が食べた桑の実」

REL 桑の実 CONJ 私 ERG 食べる PAST.PFT

12) [kum xalgr-em ki šapik rat] 「私がパンをあげた人」

REL 人 DAT-MovPt.1SG CONJ パン 与える PAST.ST

13) [kumd dukonen ki maže yem luqpar deštu] 「私がこの服を買った店」

REL 店 ABL CONJ 私 ERG DEM 服 買う PAST.PFT

関係節内では *ki* の代わりに *te* を使用する場合もある。この場合、*te* は動詞の直前に置かれる。主要部 + *kumd ki* 節の中で余剰的に用いられるのとは異なり、*ki* と *te* は共起しない。

[kumd branj maže te yitu],... (cf.11)

Keenan & Comrie(1977) や Lehmann(1986) 等による、関係節形成に関わる類型論的分析では、関係節は、節と主要部の位置関係によって、主要部外在型と主要部内在型に分類される。これに従えば、2.1.1 で述べた主要部 + *kumd ki* は、主要部が関係詞節に先行し関係節の外に位置するという点で、「主要部外在型」となる。*te* はその出現位置から関係節の範囲を確定するのが難しく、主要部の位置を決めにくいだが、8) では主要部である直接目的語が前に出るなど、統語構造上の変形が認められることから、主要部は関係節の外側に位置すると見なすこともできる<sup>13)</sup>。

一方、*kumd* + 主要部タイプでは、例文 11) に見るように、関係節の主要部 *branj* 「桑の実」が、先行する *kumd* で始まる関係節の内部に位置している。関係節内では、主要部である直接目的語 (*branj*) が動作主 (*maže*) の前に出るなど、統語構造上の変形手続きは認められるが、主要部が関係節内に置かれている点で、「主要部内在型」に分類できるといってよい。

この分類に従えば、ゴジャール・ワヒー語は「主要部内在型」と「主要部外在型」関係節の両方を持つことになる。関係詞が主要部に先行するこの *kumd* + 主要部 + *ki* 型は、タジク側も含め、ワヒー語に関する先行研究では報告されていない。また筆者がタジク・ワヒー語の話者に行った確認でも、*kumd* + 主要部タイプの使用は認められなかった。Lorimer(1958) は、関係詞文に関する提供データは多くないものの、*kumd* + 主要部型に関して全く記述しておらず、この関係節は新たに出現したタイプのようにも見受けられる。このことはどのように考えればよいのか。また、パキスタン側のワヒー語でのみ、この種の関係節型が存在しているのは何故

だろうか。

タジク・ワヒー語の関係節に関する詳細な報告は、現在のところ Grünberg & Steblin-Kamensky(1988) にほぼ限られており<sup>14)</sup>、今後のさらなる詳細な調査が必要である。しかしながら、もしこれがパキスタン側のワヒー語でのみ生じている現象であるならば、その理由を、各々のワヒー語が置かれている背景に求めることも可能である。何故ならば、冒頭に述べたように、パキスタン側とタジキスタン側のワヒー語の間に存在する語彙・文法上の違いには、各々の言語が置かれた環境に起因すると考えられるものが多いからである<sup>15)</sup>。

ここで、ウルドゥー語の関係節文を参照してみたい。

[jō šaxs rišvat xātā hai], vo gunāh kartā hai.

REL 人 賄賂 受け取る それ 罪を犯す

「賄賂を取る人は罪を犯している（ことになる）」(Shmidt 2005:196)

言うまでもなく、ウルドゥー語はパキスタンの公用語である。ウルドゥー語の関係節は上の文のように、関係詞 jō が先行詞の前に出て、主要部 šaxs 「人」が関係節内に存在する、いわゆる「主要部内在型」構文をとるのが一般的である。この関係節は、jō が単独で関係節を導き<sup>16)</sup>、ゴジャール・ワヒー語 ki のような補助要素をもたないこと、また関係詞の機能に応じて jō が変化することを除けば、ゴジャール・ワヒー語の kumd + 主要部 + ki タイプにかなり近い構造を持っている。

ゴジャール・ワヒー語は、故地であるワハン回廊から話者が現住地に移住・定着して以来フンザ藩主国時代まで、藩主国の支配階級の言語であったブルジャスキー語とその隣接言語、それに、藩主国の宮廷・通商用語であり、彼らが信仰するイスラーム教イスマール派の宗教言語であるペルシア語（＝タジク語）の影響を常に受けてきた。しかしながら 19 世紀後半以降は、いわゆる「グレート・ゲーム」をめぐる同地域への英領インドの侵出、さらに 1947 年のパキスタン分離独立、1974 年の藩主制廃止とフンザ藩主国のパキスタン併合といった相次ぐ政治変動を経て、同地域ではウルドゥー語教育が標準化され、ウルドゥー語が地域の優勢言語になってきている。現在では、ゴジャール・ワヒー語話者のほぼ全員が、ウルドゥー語とワヒー語との二言語併用者と言ってよく、かつての教養言語であったペルシア語を解するのは、宗教儀礼を行う一部の集団と知識人、それに藩主国時代に生まれた高齢者に限定されている。上でみたウルドゥー語の関係詞文との類似性と、同地域における近年のウルドゥー語の影響を考慮すれば、この関係詞型はウルドゥー語からの借用によるものとも考えることもできよう。

ゴジャール・ワヒー語に認められる kumd + 主要部 + ki 型の構造を、ウルドゥー語の関係節構造と同様に「主要部内在型」と規定するには、後に述べるように、kumd と ki の機能につい

での再検討を行い、さらなる考察を進める必要がある。しかしながら、ゴジャール・ワヒー語をめぐる、19世紀後半から現在に至る政治的・言語的環境の劇的な変化は、この現象を、近年における急激なウルドゥー語との言語接触と「脱ペルシア語化」がゴジャール・ワヒー語にもたらした、新たな関係節型と位置づける動機としては十分である。

### 2. 1. 3. 1. kumd + 主要部 + ki のバリエーション : ki...kumd + 主要部タイプ

なお、kumd + 主要部 + ki 型では、関係節の一部が強調のために文頭に出た変形タイプも高頻度に用いられている。

14) ferosat ki<sup>17)</sup> [kumd qsa ʒetu], yow-i rost.

フェラーサト REL 話 する PAST.PFT DEM-MovPt.3SG 正しい、本当の  
「フェラーサトがした話は本当だ」

この文は一見、ferosat を先行詞とする主要部 + kumd ki 型の、kumd と ki の語順が誤って逆転したような形に見える。しかしよく見ると、この関係節の主要部は qsa 「話」であり、ferosat ではない。このことは、kumd に qsa が後続していること、また主節で遠称 yow が qsa 「話」を受けていることを見れば明らかである。

この種の ki は、kumd + 主要部タイプにおいて、関係節内の人物（特に人称代名詞）や、前置詞句・副詞句が、強調のために臨時に文頭に出た場合に観察されることが多い。つまり、上の文の ferosat ki の ki は関係詞の一部でなく、臨時に文頭に出た要素に付加される、トピック標識<sup>18)</sup>の一種であると考えられる。上の文の、外見上は主要部 + kumd ki タイプの語順が逆転したかに見えるこの例は、実は kumd + 主要部 + ki 型であり、さらに、本来 kumd と共起して関係詞 (kumd ... ki) を形成するはずの ki は、前に出たトピック辞 ki との重複を避けるため省略されたと解釈できる。

次に、前置詞句が前に出た例を見てみよう。

15) ta xun ki kumd ʒuynan tu, yow-i ʒe qowm.

PREP 家 REL 女性 PAST DEM-MovPt 私 GEN 氏族  
「家にいた女性は、私の一族（のもの）だ」

ここでは ta xun 「家に」が強調のために文頭に出ている。このようにトピック化が認められるのは、関係節内で主要部が直接目的語である場合の主語や間接目的語、または前置詞句等の付加的要素など、文頭に立っても関係節内の統語関係が破綻しない要素に限定される。主要部そのものは、kumd に後置される必要があるため、前に出すことはできない。



### 2. 1. 3. 2. 本当に「主要部内在型」か？——kumd + 主要部 + ki 型の再検討

ウルドゥー語からの影響はさておき、kumd + 主要部 + ki 型は果たして「主要部内在型」なのだろうか。kumd + 主要部 + ki タイプは、kumd と ki (または tse) のいずれが関係詞の中心的役割を果たすと見なすかによって分析が変わってくる。ここで、kumd, ki, tse の関係詞的用法について考察したうえで、その構造について再検討しておきたい。

2.1.1 で述べた主要部先行型 (主要部 + kumd ki) タイプでは、kumd は主要部 (先行詞) の節内の機能に応じて変化し、関係節内の主要部は空所となることから、関係代名詞としての条件を全て備えている。この点で、kumd は単独でも関係詞として十分な資格を持っており、ki は補助的要素と言ってよい。これに対して、kumd + 主要部 + ki タイプでは kumd は常に不変化であり、代名詞的機能は低い。さらに関係詞以外の用法をみると、ki や tse はいずれの場合でも名詞に先行することはできないが、kumd は、疑問文中では疑問形容詞「どちらの～」、または不定形容詞「どんな～(でも)」として名詞に先行することができる。

一方、ki はイラン系言語全体で従属節標識として広く認められている接続詞である。例えばペルシア語 (対応語は ke) では、本来の疑問詞的用法に加え、名詞節や関係節、副詞節、同格節など、多様な従属節を導く。関係詞的用法の点から見ても、イラン語全体における ki の分布は、kumd よりも圧倒的に広い<sup>19)</sup>。さらに tse は中期イラン語期の関係詞 *čē* に由来すると考えられ、パミール諸語に共通して、従属節標識として機能することが報告されている (Payne 1989)<sup>20)</sup>。ゴジャール・ワヒー語では、現在では ki は単独では関係詞とはならないが、主要部欠如型 (不定関係代名詞節) 関係節や、kumd が不定形容詞として用いられた文では、単独で関係節を導くことができる<sup>21)</sup>。また上述のように、タジク・ワヒー語における関係節形成は、tse または ki によるものが中心である。さらにイラン語全体から通時的に見ても、kumd またはその関連語が関係節として用いられている例はほとんどなく、現在、東イラン語のパシュトー語<sup>22)</sup> で不定代名詞「どの～でも」としての用法が認められる程度である。

このように、ゴジャール・ワヒー語自体における kumd の機能と、ki, tse に関するイラン語 (特に東イラン語) 全体を通じた共時的・通言語的視点の両方を考慮すると、kumd, ki, tse は、そのいずれもが、関係詞としての中心的役割を果たす資格を十分に有していると言えることができる。例えば、kumd 系統による関係節がイラン語全体としてはマイナーであることを考慮し、kumd + 主要部型では kumd がほぼ不変化であること、また疑問形容詞として名詞に先行できる点を視野に入れると、暫定的に「主要部内在型」と規定したこの kumd + 主要部 + ki タイプを、kumd を ya に類似の機能を持つ相関詞の一種として捉え、実際に関係詞として機能するのは ki (または tse) であるとする分析も、また可能なのである。

ペルシア語を代表とするイラン系言語において、特に ki (ペルシア語では ke) の接続詞と



しての用法はあまりに多様である。加えて、従属節標識としての *ki* は前接的であるため文頭に来ることができず、主要要素の次に置かれやすいという生起位置の特殊性もあり、その機能の全容はまだ解明されていない。*kumd* + 主要部 + *ki* の類型論的位置づけは、*kumd* 自体の分析もさることながら、イラン語（少なくとも東イラン語）における *ki* の機能が明らかにならない限り、いつの場合でも異なる分析の可能性を含んでいる。このため本稿では、*kumd* + 主要部 + *ki* の関係節タイプは、暫定的に「主要部内在型」と規定し、相関詞的用法を持つ *kumd* + 主要部が関係詞 *ki* に先行した、別タイプの主要部外在型（主要部先行型）関係節としての解釈も成り立ちうることを、指摘するにとどめておく。

## 2. 2. 主節との関係

ここまで見てきた主要部 + *kumd ki*, *kumd* + 主要部 + *ki*, さらにその変形パターン *ki* + *kumd* + 主要部 + (*ki*) では、その用法が混同されることもしばしばであり、またインフォーマントによって適格文・非適格文の判断が分かれる場合も認められる。このように標準化が困難となる状況には、類似の形式を有する複数の関係節パターンが存在することに加え、同言語がもつ関係詞文の構文上の特徴も、その誘因の一つとなっていることが考えられる。ここでは、関係節と主節の関係という関係節構文全体の視点から、その理由について考察してみたい。

ゴジャール・ワヒー語の関係節構文では、関係節と主節との関係から、埋め込み型と接合型の両方が認められる。

### 2. 2. 1. 埋め込み型

主節内に関係節が埋め込まれるタイプで、主要部 + *kumd ki*, *tse* を用いた関係節構文、*kumd* + 主要部 + *ki* のすべての関係詞タイプで見られる。ただし埋め込み型が認められるのは、主要部が主節の主語または直接目的語になる場合や、分裂文中がほとんどである。主要部が主節内で属格である場合などでは、埋め込み型で表示することは難しいように見受けられ、この場合は後述の接合型をとり、主要部が主節における近称・遠称等の相関詞によって受け直されるのが普通である。なお、主要部が主節の直接目的語となる場合は、述部が関係節の前に出ることが多い。

16) *ya*      *šuynan*    [*dra-š*                      *yark*    *tse*    *tsart*]                      *že*                      *jmat-i*.  
 DEM 女性    そこ -PROG.SUF    仕事    REL    する    PRES.3SG    私 GEN    妻 -MovPt.3SG  
 「あそこで仕事をしている女性は私の妻だ」

17) [*kumd*    *qsa*    *ki*                      *yaše bobaten*    *towe*                      *kert*]                      *šafč*                      *xušruy-i*.  
 REL    話    CONJ    馬について    君 ERG    する    PAST.ST    とても    面白い -MovPt.3SG

「君が馬についてした話はとても興味深い」

18) yem-i aya xuynan [kumdr-em ki luqpar ratu].

これ -MovPt DEM 女性 REL.GEN.-MovPt1SG 洋服 与える PAST.PFT

「これは私が洋服をあげた女性だ」(分裂文)

19) yezi maže aya day dixt [kumden-em ki kar deštu].

昨日 私 ERG DEM 男 殴る PAST.ST REL.ABL-MovPt 車 買う PAST.PFT

「昨日私は(私が彼から)車を買った男を殴った」

### 2. 2. 2. 接合型

ゴジャール・ワヒー語の関係節構文は多くの場合、上のような埋め込み型でなく、関係節の主要部が主節内で、近称・遠称等の相関詞によって受け直される形式をとる。この種の文では、関係節は主節と統語的關係になく、主節に付加または接合的に提示される形になっている。Comrie(1981), Lehmann(1986)等では接合型または付加型(adjoined)と呼ばれるタイプである。ゴジャール・ワヒー語では、このタイプの構文はすべての関係詞タイプで見られ、「埋め込み型」よりも、圧倒的に使用頻度が高い。

20) ya kaš kumder ki maže šapik rat,

DEM 少年 REL.DAT CONJ 私 ERG 食事 与える PAST.ST.

yow-i karim-e petr.

DEM-MovPt3SG カリム GEN 息子

「私がご飯をあげた少年は、彼はカリムの息子だ」

21) maže tower luqpar tse ratu yow-et kumer liker?

私 ERG 君 GEN 服 OBL2 REL 与える PAST.PFT DEM-MovPt.2SG どこに 置く PRES.PFT

「私が君にあげた服は、あれはどこに置いた？」

22) kumd-em ki čežner tey yow-i ska kor.

REL-MovPt1SG CONJ 殺す INF.DAT PRES DEM-MovPt3sg PREP 岩山

「私がつぶすつもり(家畜)は、それは岩山の上にいる」(主要部欠如型)

#### 2. 2. 2. 1. 接合型関係節構文と認知的前提

しかしながら、接合型文では、構造的にはエラー文と予測されるが、話者によって適格度が分かれる、さまざまな例が存在する。例えば上の15)については、次の例も確認している。

15') ya xuynan ki kumd ta xun (tse) tu, yow-i že qowm

この文では、本来は前置詞句がトピックで前に立つはず(ta xun ki kumd xuynan tu,...)が、誤っ

て関係節の主要部 *šuynan* が出てしまっている。上述のように、*kumd* + 主要部 + *ki* タイプでは主要部は *kumd* の直後に置かれるべきであり、これが前に出て関係節内を空所にするにはできない。このため、これは非文と判断されるべきである。にもかかわらずこの文については、インフォーマントによって適格度の判断が分かれる。「不適格」と判断された理由は言うまでもなく、この関係節の構造が非文となるからからであり、「適格文」と主張された理由には、トピック標識の *ki* が他の関係節型との混同から関係詞と類推され、さらに主節の *yow* は本来の主要部 *šuynan* に対応しており、文全体の論理構造は破綻しないと捉えられたためと考えられる。

これ以外にも、主節の相関詞が関係詞の主要部と一致しない例や、共通の関係節を持つにもかかわらず、主節における相関詞の標示対象が異なる例も多数確認される。

23) *ya tuŷ-i kumd ki ska ku tey, yow-i ondra.*

DEM ヤギ -MovPt REL ~の上に 山 PRES あれ -MovPt

「あのヤギが山の上にいるが、あれ (=山) はオンドラ (山の名称) だ」

24) *sk kumd ku-i ki ya tuŷ tey, yow-i qorbon-en.*

PREP REL 山 -MovPt3sg CONJ DEM ヤギ PRES DEM-MovPt3SG ゴルバーン ABL

「山の上にヤギがいるが、あれ (=ヤギ) はゴルバーン (人名) のだ」

25) *še zmaner ki kumd maže šapik rat yow yung tu.*

自身 子供 DAT REL 私 ERG パン 与える PAST.ST. DEM 生焼け PAST

「私が子供にやったパンは生焼けだった」

26) *še zmaner ki kumd maže šapik rat yow ts kuŷten lup tu.*

DEM 誰よりも年上だった

「私がパンをやったのは一番上の子だ」

23) は *tuŷ* を主要部とする主要部 + *kumd ki* 型、24) は主要部を *ku* とする *kumd* + 主要部 + *ki* 型である。23) では、主節の *yow* は主要部 *tuŷ* 「ヤギ」に合わなくてはならないが、実際は関係節内の主語 *ku* 「山」に合っている。一方で、*kumd* + 主要部型の 24) では、相関詞は主要部 *ku* 「山」に合うべきであるが、実際は関係節内の主語 *tuŷ* 「ヤギ」に合っており、いずれの文でも、主節の相関詞と関係節の主要部が交錯している。25), 26) では、二文に共通する前半の関係節は、トピック標識 *ki* のついた *kumd* + 主要部型だが、主節の *yow* は、25) では主要部 *šapik* 「パン」に合っているのに対し、26) では文頭に立つ *zman* 「子供」を表し、各々の文で相関詞の表示対象が異なっている。

このように、同一の構造を持つ文が矛盾する意味解釈を持つ例は、接合型文でしばしば認められ、いずれの文も適格 (またはそれに近い) 文と判断されている。これらを観察すると、関

係節の一部がトピック化で文頭に出る場合のように、関係節文中に相関的に表示できる要素が複数存在する場合は、その発話状況から、認知的に最も際立っている要素を主節で受け直すことができると考えてよい。さらに 15') のように、認知的前提が明確であれば、関係詞の構造に少々問題があったとしても、主節の相関詞で再度受け直すことによって、いわば文全体の論理構造のリカバリーが可能になり、「やや奇異」という印象を与えながらも、実用上はそれほど深刻な問題を引き起こさないと考えられる。この「リカバリー」は、構造的な制約の厳しい埋め込み型では恐らく不可能と考えられ、より明示的な特徴を持つ接合型ならでは現象ということができよう。

### 結語

ここで、これまで述べてきたゴジャール・ワヒー語の関係節構文についてまとめておく：

ゴジャール・ワヒー語の関係節は、①主要部 + kumd + ki ②主要部 + tse ③ kumd + 主要部 + ki によって形成される。③はワヒー語については未報告の、①②とは異なる「主要部内在型」をもつ新たな現象と考えられる形で、ウルドゥー語の関係節構文からの影響が指摘できる。③は、関係節内の一部の要素がトピック標識 ki を伴って文頭に立ち後半の ki が省略された、変形パターンをもつ。この結果同言語では、類似の形式を持つ関係節型が存在する上に、一部に同一形式で異機能を持つ ki も含まれることがあり、このことが関係詞型の混同や使用上のエラーを引き起こすなどの原因となっている。

このような状況では、紛らわしい用法を持つ関係節は構造的に脆弱なものから排除されるなど、何らかの手段で集約される方向に向かうことが予見できる。しかしながら、同言語の関係節構文は多くの場合、埋め込み型でなく、相関詞を用いて主要語を再標示できる、より明示的な接合型をとる。しかも、本来は関係節の主要部に対応するはずの相関詞は、関係節内の複数の要素のうち、認知的前提が明確であるものを主節で受け直すことが可能である。言ってみれば、接合型がもつこの明示性・柔軟性が、このような紛らわしい関係節型の共存を許し、実用上では、関係節の構造に少々のエラーが生じて、これを吸収し論理構造のつじつまを合わせて、曖昧性を回避する役割を果たしていると言える。

以上の分析に従って、冒頭に掲げた例を再掲示して説明してみよう。

「あそこに立っている少年」

- a. ya kaş kumd ki dra vrvsetk...
- b. ya kaş ki kumd dra vrvsetk ...
- c. kumd kaş ki dra vrvsetk ...
- d. ya kaş dra tse vrvsetk ...

「君が持ってきたグラス」

e. ya gilos kumd ki towe wuzmetu ...

f. ya gilos ki kumd towe wuzmetu ...

g. kumd gilos ki towe wuzmetu ...

h. towe ki kumd gilos wuzmetu ...

i. ya gilos towe tse wuzmetu ...

異なる関係詞 *tse* による d と i を除く 3 例 + 4 例のうち、①主要部 +*kumd ki* 型を取るのは a, e で、c と g は③ *kumd* + 先行詞 + *ki* 型を取る。h は③型の人称代名詞 *tow* 「君」が強調で文頭に出た形で、この *ki* は関係詞でなくトピック辞である。冒頭で述べたように、b と f はインフォーマントによって適格性の判断が分かれる。f は、本来トピックとして文頭に立っていないはずの主要語が *ki* を伴って関係詞の前に出たため、非文となるはずである。しかし、

ya gilos ki kumd towe wuzmetu maže yow šket.

「君がコップを持ってきてくれたのだが、私はそれを割ってしまった」

のように、接合型文をとって主節の相関詞が *gilos* を明示する場合は、インフォーマントには「理解可能」と判断される。つまり、話者間の認知的前提が明確である場合は、関係節内の不適格性が高くても、主節の相関詞によって論理構造を立て直すことができる。一方で、b は文頭に立っていない主要部 *kaš* が関係節の前に出たため、f と同じく関係節内の構造が破綻しているが、自動詞文あり f のように主節で受けられる要素が他に存在しないため、主節におけるリカバリーが効かず、限りなく非文に近い文と判断されたと考えられる。

最後に、*kumd* + 主要部型の関係節については、ウルドゥー語との言語接触の結果生じた、新たな形式の可能性があることを指摘した。ウルドゥー語・ヒンディー語の関係詞節は、「主要部内在型」に分類され、主節が一般的に相関的構文をとることが知られている。ゴジャール・ワヒー語の関係節構文に認められる、この相関詞を用いた接合型構文は、ウルドゥー語から関係節構文を借用した際に、その相関的構文も同時に採り入れたと考えることもできよう。しかし、ゴジャール・ワヒー語は本来、関係詞文以外でも相関詞による受け直しが高頻度に認められる言語であり、接合型の関係節構文の存在はタジク・ワヒー語側でも報告されている。これらの点から、ウルドゥー語からの影響を肯定的に捉えたとしても、新たな関係節型と同時に、主節の相関的構文までもが入ったとは考えにくい。それよりも、ゴジャール・ワヒー語が本来もっていた、相関詞の多用という語法上の特徴が、主要部内在型という新たな関係詞タイプを容易に採り入れる受け皿となった、と解釈する方が妥当であろう。

ゴジャール・ワヒー語の関係節構文をめぐる、使用上の混乱と不安定性については、繰り返

し述べた通りである。このような現状に至った経緯は、概ね以下のように想定できよう。まず、ゴジャール・ワヒー語が本来持っていた、東イラン語系統の関係詞 *te* と *kumd* に、ペルシア語の影響を受けた万能従属節マーカー *ki* が加わり、それぞれが複合的に機能する関係詞として定着した。そして、近年における同言語をとりまく言語環境の変化の結果、ウルドゥー語から新たな形の「主要部内在型」関係節が、*ki*, *kumd*, *te* のワヒー語がもつ構成要素を用いた、いわば翻訳借用のような形で採り入れられ、さらに *ki* の機能上の多様性が加わって、複雑さが増した。このことに加え、ゴジャール・ワヒー語は本来、相関詞を多用するという特徴を持っていた。関係節構文が「埋め込み型」であれば、構造上不適格な文はある程度排除されていくはずであったが、接合型文では対象の明示性が高いため、前半の関係節の乱れを吸収して曖昧さを回避することが可能となり、結果としてさらなる用法の多様化と乱れにつながった。

なお、ゴジャール・ワヒー語の関係節文に関する最終的な類型論的位置づけについては、タジク・ワヒー語側の調査・研究の成果を待ちながら、接続詞 *ki* や *te* の機能の全容を解明し、さらに考察を進めていく必要がある。これについては今後稿を改めて述べていくことにしたい。

## 謝 辞

本稿は、平成 27 年度文部科学省科学研究費「ゴジャール・ワヒー語記述文法書の作成」（課題番号 15K02507）による調査研究成果の一部である。

タジク・ワヒー語の関係詞に関する確認に際しては、Sherali Gulomaliev 氏（筑波大学博士後期課程）の協力を得た。また、ウルドゥー語の関係詞文については、萬宮健策氏（東京外国語大学総合国際学研究院准教授）からご教示をいただいた。記して感謝したい。

## 略語一覧

ABL	奪格	OBL	斜格
ACC	対格	PAST	過去
CONJ	接続詞	PFT	完了
DAT	与格	PREP	前置詞
DEM	指示詞	PRES	現在
ERG	能格（斜格 1）	PROG	進行
GEN	属格	REL	関係詞
INF	不定詞	SG	単数
MovPt	Moving Particles(→注 6)	ST	語幹
NEG	否定	SUF	接尾辞

## 注

- 1) ゴジャール・ワヒー語の主な先行研究には, Morgenstierne (1938), Lorimer (1958), Bashir(2009) 等があるが, 関係詞文に関する十分な記述は行われていない。Morgenstierne(1938) ではワヒー語はイラン系少数言語を概観する一部として言及されるのみで, 特に音声面に紙幅が費やされており, 関係詞文に関する記述は認められない。Lorimer (1958) は, 形態論では詳細なデータが提供されているものの統語論面での記述はやや手薄で, 関係詞文については, ki による関係詞文と, 疑問代名詞を用いた不定関係詞について十数例が紹介されているのみで, その構造についての説明はない。Bashir(2009) では, そもそも数例しか提示されていない関係詞文に関するデータに, タジク側とパキスタン側のワヒー語のものが混在している。
- 2) kumd と ki の連結度が高くなる kumde ki が正しいが, 実際は -e が脱落した形が用いられる。
- 3) タジク・ワヒー語では, 関係節は tse を用いて形成され, ペルシア語の関係詞 ke (タジク語では ki) に影響を受けたと思われる, ki と共起する関係節の例も報告されている [Grünberg & Steblin-Kamensky(1988): 103-4]。
- 4) kumd は本来, 疑問詞的用法に加え, 関係詞として関係節を導いたり, 不定代名詞として用いられることがある。kumd の関係詞としての用法は Lorimer(1958) に認められるが, ここでは, 「1 回のみ出現」として, kumd(-i) ki 「～は誰でも」の用法のみがあげられている。また, Bashir(2009) では, タジクスタン/パキスタンのいずれに分布するワヒー語か明示していないが, 主要部 + kumd ki の用例が報告されている。筆者がタジク・ワヒー語の話者に確認した限りでは, 現在のタジク・ワヒー語では関係詞は tse が主流で kum(d) による関係節形成は不可とのことである。
- 5) ゴジャール・ワヒー語の指示詞には, 近称 yem, 中称 yet, 遠称 yow, それに定の事物を示す ya がある。近・中・遠称の用法, 談話関与者の距離関係だけでは分析できない例も認められており, さらなる考察を必要とする。
- 6) 本来のイラン系言語の人称代名詞接尾辞形を継承する前接辞で, パミール諸語に代表的な文法事象の一つ。人称・数によって変化し, ゴジャール・ワヒー語では以下の 6 形がある。Moving Particles は語幹等に固定して接続するのではなく, 生起位置が移動するのが大きな特徴で, この名称の所以ともなっている。

	単数	複数
1	-em	-en
2	-et	-ev
3	-i / -	-ev / -uv

イラン系言語の人称代名詞には, 伝統的に, 独立形および接尾辞形が存在し, 接尾辞形は古代イラン語期では格変化も有していたほか, すでに格の別が失われた現代ペルシア語などにおいても, 属格, 与格, 対格的な機能を果たすなど, 多彩な用法がみられる。一方で, ワヒー語の Moving Particles は, 接続する要素の自由度は高いが, その標示対象は論理主語に限定され, 現在・過去時制でコピュラとなるほか, 活用形の補助要素となったり, 過去時制では人称代名詞の独立形が省略された場合に他動詞の動作主を表示する機能をもつ。

- 7) 名詞句接近可能性階層 (Noun Phrase Accessibility Hierarchy) を提案した Keenan & Comrie (1977) 等の一連の研究による, 通言語的にどのような文法関係にある名詞句が関係節化されやすいかという階層。主語 (SU) > 直接目的語 (DO) > 間接目的語 (IO) > 斜格名詞句 (OBL) > 属格名詞句 (GEN) > 比較の対象 (OCOMP) の順で階層を成しており, 左に位置する名詞句 (上位レベル) ほど関係節化されやすい。
- 8) ゴジャール・ワヒー語の過去時制では, 他動詞の動作主は斜格 1, 直接目的語は斜格 2 に立つ。斜格 1 は, 過去時制における他動詞の主語および現在時制における直接目的語を指す。斜格 2 は, 過去時制における他動詞の直接目的語を示す。このように, 斜格 1 は能格構文における論理主語を表示するための専用格ではないので, 吉枝 (2009) では便宜上これらの格を斜格 1, 斜格 2 と称している。ただし, ここでは, その機能の面からそれぞれ能格, 対格と称する方が分かりやすいため, 過去時制における他



動詞の論理主語を能格 (ERG), 現在時制における直接目的語および過去時制における論理的目的語は, そのまま斜格 2(OBL2) としておく。ゴジャール・ワヒー語の格組織と能格構文の詳細については, 吉枝 (2009) を参照のこと。

- 9) 本来はコピュラ動詞の語幹であったと考えられるが, 活用形や不定詞等は確認されていない。ゴジャール・ワヒー語では, MovPt と共に補助的に用いられて存在を表す (現在時制では *tey*, 過去時制では *tu*)。なお, 現在ではゴジャール・ワヒー語では MovPt がコピュラの機能をもつ。
- 10) 前置詞 *t'* と近称 *yem* の縮約形
- 11) 前置詞 *ts'* と近称 *yem* の縮約形
- 12) 例えば, *yezi-š tu tse wezde sake-š žaw pilwišt*. 「昨日君が来たとき, 私たちは風選をしていた」
- 13) Bashir(2009) では, *tse* を用いた関係節は, 関係詞構文全体が「埋め込み型」をとる場合は主要部外在型, 接合型である場合は主要部内在型をとると説明している。ただし, 埋め込み型・接合型のどちらの場合でも *tse* を用いた関係詞節に構造上の相違は認められないため, 関係詞内部の構造に関する分析としては疑問が残る。いずれにしても *tse* は関係詞文以外でも従属節を導く際は動詞の直前に出現し, 前接的である *ki* とは異なりストレスが置かれるなど, その機能に未解明な部分も多く, さらなる考察が必要である。
- 14) Bashir(2009) で提供されている, タジク・ワヒー語の関係節に関するデータは全て Grünberg & Steblin-Kamensky (1988) と Pahalina (1975) によるものである。タジク・ワヒー語の関係節については, Grünberg & Steblin-Kamensky(1988):95, 103-4 等を参照。
- 15) 例えば, パキスタン側のゴジャール・ワヒー語は, 中期イラン語期に由来する過去時制における能格構文を保持するが, タジキスタンに位置し, 「ペルシア語化 (=タジク語化)」が顕著に進むタジク・ワヒー語では, 能格構文は失われ, すべて主格・対格構文に移行している。詳しくは吉枝 (2009) を参照。
- 16) ウルドゥー語でも接続詞 *ke* が *jo* と共起して補助的に機能する場合があるが, その出現条件についての詳しい報告はなされていないとのことである。
- 17) トピック標識としての *ki* は, 下の注における例文のように余剰的に用いられる場合もあり, 接続詞か小辞か確定できない。このためこの *ki* については, 語積は付さないままにしておく。
- 18) この *ki* の用法は, 関係詞文以外でも確認される:  

<i>maže</i>	<i>ki</i>	<i>yupk</i>	<i>nepit</i> .	「私は水を飲まなかった」
私 ERG		水	飲む NEG.PAST.ST.	

 ペルシア語 *ke* の同様の用法を参照:  

<i>man</i>	<i>ke</i>	<i>nagoftam</i> .	「私は言わなかったよ」
私		言う NEG.PAST.ISG	

 なお, Lorimer(1958) では, *čiz ki...* 「～は何でも」の異形として *ki čiz...* をあげている。一例のみ提供されているデータは *žunən ki čiz to maže tower detu...* 「私が君にあげた物は何でも ...」であり, この *ki* は *čiz ki* と共起するのではなく, *žunən* に付加されたトピック標識と *ki* と考えられる。
- 19) 中期イラン語 (東イラン語) に遡れば, 関係詞はソグド語 *ke* または *ču*, ホラズム語 *ki, ci (či), ca(ča), ka*, ホータン語 *kye*, 現代イラン語 (東イラン語) では, パシュト一語 *če/tse*, シュグナン語 *tsa* である。なお中期ペルシア語の関係詞は *ī* (後にエザーフエへ移行), *kē, čē* で, 現代イラン語のペルシア語 (西イラン語) は *ke* である。これを見ても, 東イラン語の関係詞の分布は, ほぼ *k-* 系統か *č-(ts-)* 系統に大別されることが分かる。
- 20) Payne(1989):441. さらに Payne はワヒー語における *ki* はタジク語からの借用と説明している。また, パキスタン北西部に分布するイラン系言語 (東イラン語) と, ペルシア語, ウルドゥー語との言語接触の状況とその影響については, Bashir(2006) も参照できる。
- 21) cf. *kumde be ki zoq tsar tsemven yiw durz*. 「君が欲しい物をどれでもこの中から取れ」ここでは, *kumd* は不定代名詞として機能しており, 関係節を導くのは *ki* である。譲歩を表す小辞 *be* は必ず *ki* と共起する。このような主要部不在型文では, *kumd* (物), *čiz* (物), *kuy* (人) の疑問詞が不定代名詞として用い

られる。Lorimer(1958)でも類似の ki の用法が紹介されている。

さらに, kumd 等の疑問詞が名詞に先行して不定形容詞「どの～」として用いられる場合も, 単独で関係節を導くことができる。cf. kum(d) kitobišt ki žə dast tu maže yar det. 「私は持っていた本をすべて彼にやった」

譲歩を表す小辞 be は必ず ki と共起する。このような主要部不在型文では, kumd (物), čiz (物), kuy (人) の疑問視が不定代名詞として用いられる。Lorimer(1958)でも類似の ki の用法が紹介されている。

- 22) kum sarāi če 'the man who, any man who' [Morgenstierne(1927):32]。この用法は新版(2003)では削除されている。また, Ann Boyle David(2014)では報告されていない。

なお, Morgenstierne(1938)は, このパシュト一語 kum との比較から, ワヒー語の kumd の起源について <\*kāma を提案している。

### 参考文献

- Anne Boyle David, 2014. *Descriptive Grammar of Pashto and Its Dialects*, New York, Mouton de Gruyter.
- Backstrom, Peter C. 1992. "Wakhi" and "Appendix D Wakhi Survey Data" in Backstrom, Peter C. & Carla F. Radloff, *Sociolinguistic Survey of Northern Pakistan 2. Languages of Northern Areas*, Islamabad, National Institute of Pakistan Studies, Quaid-e-Azam University/Summer Institute of Linguistics, pp.57-74 and pp.273-92.
- Bashir, E. 2006. "Indo-Iranian Frontier Languages", in *Encyclopedia Iranica* (online), Eisenbrauns.
- 2009. "Wakhi", in Windfuhr.G (ed.) *The Iranian Languages*, London and NewYork, Routledge. pp.825-59.
- Comrie, B. 1989. (2nd ed.) *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*. Blackwell, 『言語普遍性と言語類型論』(松本克己・山本秀樹訳) ひつじ書房 1992 年.
- Edelman, D.I. and R.Dodykhudoeva, 2009. "The Pamir Languages", in Windfuhr.G (ed.) *The Iranian Languages* London and NewYork, Routledge. pp.773-86.
- 2009. "Shuguni", in Windfuhr.G (ed.) *The Iranian Languages*, London and NewYork, Routledge. pp.787-824.
- Greenberg, J.D. 1963. *Language Universals*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Grünberg, A.L. & I.M. Steblin-Kamensky. 1988. *La langue Wakhi, Essai grammatical et dictionnaire wakhi-français*, édité et traduit par Dominique Indjoudjian, suivi de *Dictionnaire français-wakhi* établi par Larissa Kydyrbaiéva, Maison des Sciences de l'Homme, Paris [original Russian edition 1976].
- 今村泰也, 2008 「日本語とヒンディー語の関係節の対照研究—関係節の種類と特徴, 関係節化の可能性について—」『麗澤大学紀要』87, pp.15-38.
- Keenan, E. and B.Comrie, 1977. "Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar", *Linguistic Inquiry* 8, pp.63-99.
- Lehmann, Christian. 1986. "On the typology of relative clauses". *Linguistics* 24, pp.663-80.
- Lorimer, D.L.R. 1958. *The Wakhi Language*, I. *Introduction, Phonetics, Grammar and Texts*, II. *Vocabulary and Index*, School of Oriental and African Studies, University of London.
- (私家版; 本書は SOAS の Nicholas Sims-Williams 教授より, 2005 年 6 月に恵与されたものである。同教授のご厚意に感謝する)
- Morgenstierne, Georg. 1927. *An Etymological Vocabulary of Pashto*, Oslo.
- 1938. "Wakhi" in Morgenstierne, Georg. *Indo-Iranian Frontier Languages*, Second Edition, *Revised and with New Material*, vol. 2 *Iranian Pamir Languages – Yidgha-Munji, Sanglechi-Ishkashmi and Wakhi*, Institute for Sammenlignende Kulturforskning, Universitetsforlaget, Oslo/Bergen/Tromsøe.
- 2003, *A New Etymological Vocabulary of Pashto*, ed by J.Elfenbein, D.N.MacKenzie, and N. Sims-Williams, Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Pahalina, T.N. 1975. *Vahanski jazyk*, Moskva.

- Payne, John 1980. "The Decay of Ergativity in Pamir Languages", *Lingua* 51, pp.147-86.
- 1989. "Pamir Languages", in Rüdiger Schmitt (ed.) *Compendium Linguarum Iranicarum*, Wiesbaden, Dr.Ludwig Reichert Verlag, pp.417-44.
- Reinhold, Beate 2006. *Neue Entwicklungen in der Wakhi-Sprache von Gojal (Nordpakistan)*, Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Schmidt, R.L. 2005. *Urdu: An Essential Grammar*. London and New York, Routledge.
- Schmitt, R. (ed) 1989. *Compendium Linguarum Iranicarum*, Wiesbaden, Dr.Ludwig Reichert Verlag,
- 鈴木 斌, 1981 『基礎ウルドゥー語』 大学書林.
- 1996 『ウルドゥー語文法の要点』 大学書林.
- 立町健悟, 2015 「中世ペルシア語における関係代名詞の用法について」『西南アジア研究』 82, pp.17-42.
- Wendtland, Antje, 2009, 'The Position of the Pamir Languages Within East Iranian', *Orientalia Suecana* LVIII, pp.172-88.
- Windfuhr, G. (ed.) 2009. *The Iranian Languages*. London and New York, Routledge.
- Yoshie, Satoko 2005a "The Sound System of Gojal Wakhi", 『東京外国語大学論集』 71, 東京外国語大学, pp.43-82.
- 2005b "Gojal Wakhi Basic Vocabulary" 『言語情報学研究報告』 No.8., 21 世紀 COE プログラム 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」 東京外国語大学, pp.401-77.
- 吉枝聡子 2007 「ワヒー語婚礼歌 Sinisay」『東京外国語大学語学研究所論集』 東京外国語大学語学研究所, pp.101-18.
- 2008 「ゴジャール・ワヒー語の動詞体系」『東京外国語大学論集』 76, 東京外国語大学, pp.35-62.
- 2009 「ゴジャール・ワヒー語の能格構文」『東京外国語大学論集』 78, 東京外国語大学, pp.273-88.
- 2014 「ゴジャール・ワヒー語の使役構文」『東京外国語大学論集』 88, 東京外国語大学, pp.303-28.
- (ワヒー語基礎語彙ウェブサイト：[http://cblle.tufs.ac.jp/med\\_min\\_lang/wakhi/](http://cblle.tufs.ac.jp/med_min_lang/wakhi/))

## On the Relative Clause Construction in Gojal Wakhi

YOSHIE Satoko

Relative clauses in Gojal Wakhi are formed by means of the interrogative/indefinite pronoun *kumd*, the complementizer *ki*, and the subordination conjunction *ʁe*. RCs are grouped into the following three types: 1) head + *kumd ki*, 2) head + *ʁe* (which precedes the verb in RC), and 3) *kumd* + head + *ki*. Type 1) is the most basic pattern of RC in Gojal Wakhi, whereas the type 2) is supposed to be more authentic and is widely used in Tajik Wakhi; it is also noted that the type 1) is highly productive since it is possible to relativize on the all constituents of the Noun Phrase Accessibility Hierarchy (Keenan & Comrie 1977 etc.). Type 3), which seems to show the 'head-internal relative clause' construction, is observed for the first time in this study and considered a new 'loan construction' from the relative clause in Urdu, the national language of Pakistan. When topicalization occurs in type 3), the complementizer *ki* might be omitted as another topic marker *ki* is attached to the element temporarily shifted before the RC. [*kumd qsa ki ferosat ʁetu, yow-i rost* → *ferosat ki kumd qsa ʁetu, yow-i rost*. 'The story which Ferasat told is true']

The RC may be either embedded in the main clause or adjoined to it. In the case of the adjoined RC which is prevalent in Gojal Wakhi, the head noun is generally represented by the anaphoric correlative in the main clause. However, when multiple elements are employed in RC, the correlative does not necessarily match the head but may instead agree with the one which is cognitively salient (e.g. the preposed topic element). These abundance of the relative clause constructions and the diversity found in the semantic structures of relative sentences sometimes cause the complexity or confusion in its practical use.

The present paper aims to provide the first-ever thorough description of the relative clause constructions in Gojal Wakhi and to illustrate the mechanism how the semantic diversity occurs in relative sentences.

